

○データバリューチェーンのグッドプラクティス

- ・衛星の開発、データ取得、解析、サービス提供までを一気通貫で実施する取組は、データバリューチェーンの具体的な「グッドプラクティス」として参考になる。
- ・データそのものではなく、解析結果やインテリジェンスを迅速に利用者へ提供することが重要。標準化・自動化と、個別の利用ニーズへの対応を両立する仕組みが必要である。
- ・単一の観測データだけでなく、異なる衛星、センサー、海洋観測等のデータを組み合わせることにより、時間的・空間的な観測の不足を補い、解析結果の価値を高めることができる。

○観測側へのフィードバックとデータの利活用

- ・データバリューチェーンを自律的なものにしていくためには、利用者からサービス提供者へのフィードバックだけでなく、サービス提供者から観測実施者へニーズや改善要望を還元する仕組みが必要である。
- ・観測データがどのようなサービスや社会的価値につながったのかを把握し、その社会的インパクトを観測の評価や継続的な予算措置に反映させることが重要である。
- ・観測データや解析結果のオープン化は、新たな研究やサービスの創出につながる。一方、民間事業者のビジネスとの両立が必要であり、公的支援や利用条件の設定など、オープン化を促す仕組みを検討する必要がある。

○海洋分野等におけるデータバリューチェーンの展開

- ・海洋分野では、リアルタイムの現場観測データや地方自治体、研究機関等が保有するデータを容易に取得・利用できるプラットフォームが十分に整備されていない。
- ・漁業者等が取得した観測データや現場の経験知を科学的な情報と組み合わせ、それによって予測精度やサービスが向上するという循環を構築することが重要である。
- ・漁場予測や操業効率化にとどまらず、生物多様性の保全、漁業資源管理、洋上風力発電、環境影響評価、ブルーエコノミー等と組み合わせることにより、海洋データの利用分野を広げることができる。

○地球観測と社会との接続

- ・地球観測データの価値や重要性について、社会的認知度が依然として低く、利用促進のためには普及啓発が必要である。
- ・社会科学や政策研究との連携を強化し、地球システムと社会システムを結び付けた議論を進めるべきではないか。
- ・データの利活用や社会実装を担う人材、研究者と民間事業者をつなぐ人材の育成が重要である。